

言語から連想される色彩イメージ比較研究

- 韓国人、日本人、日本在住韓国人を対象に -

Study of the comparison of a color image associated from language -for Korea and Japan-

車 貞玖 Cha Jeongmin 神奈川大学人文学研究所 Institute for Humanities Research, Kanagawa University
三星 宗雄 Mitsuboshi Muneo 神奈川大学人間科学部 Department of Human Sciences, Kanagawa University

キーワード: 色彩イメージ、言語、日本と韓国

Keywords: color image, language, Japan and Korea

1. はじめに

本研究は、韓国と日本の相互理解を目的とし、韓国人、日本人、日本在住韓国人の3集団を対象に、言語から連想される色彩イメージを比較検討した。第1に、色調に関する色彩語から連想される色調領域の範囲を比較した。第2に、「韓国」と「日本」という国のイメージと色との関連、また、その色を選んだ理由を通して各集団が抱いている日・韓のイメージを比較した。これらの各群における共通点と相違点の結果は、日・韓の交流に基礎的資料として有効であろう。

2. 研究方法

調査参加者: ①韓国人群: ソウル市に居住する社会人71名(男34名、女37名、平均年齢38.0歳[SD=4.2])。②日本人群: 東京都に居住する社会人70名(男35名、女35名、平均年齢41.5歳[SD=8.2])。③日本在住韓国人群: 東京都に居住する社会人70名(男32名、女38名、平均年齢40.6歳[SD=5.3])。実施期間: 韓国では2009年3月、日本では2009年4月～7月。

使用色彩: 基本6色相(R、O、Y、G、B、P)に対する11の色調(pale, light grayish, grayish, dark grayish, light, soft, dull, dark, bright, deep, vivid)の66色(PCCS: 配色カード199c, 2cm×2cm)を用いた。66色は長波長系列色(R、O、Y)と比較的短波長系列色(G、B、P)として分け、2種類のチャートにした。各々33色の色は背景紙(N5, 26cm×18cm)にランダムに配置された。便宜上、以下から長波長系列色をA型、短波長系列色をB型として表記する。

使用言語: 1. くすんだ色、2. 柔らかい色、3. 明るい色、4. 暗い灰みの色、5. 濁った色、6. 鮮やかな色、7. 強い色、8. 暗い色、9. 薄い色、10. 明るい灰みの色、11. 澄んだ色、12. 濃い色、13. 日本を色で表すと何色ですか、14. 韓国を色で表すと何色ですか、の14項目。

手続きおよび分析: 提示された言語に対して、連想されるイメージの色を提示されたチャートの中から選ぶ

ようにした。1番から12番までの言語項目では、選択数に制限がなく、13番と14番では選択数(1つ)の制限があった。各項目で選ばれた色数を色調ごとに分け、色調ごとの総色数を用いて百分率として計算し、各群の結果を比較した。

3. 結果及び考察

3.1. 色彩語から連想される色域における日韓比較

3集団間において、選択された頻度の差は少し異なるものの、色域の範囲が非常に一致された色彩語は「鮮やかな色」と「薄い色」であった。3集団が「鮮やかな色」としてもつイメージは「vivid」、「bright」、「pale」の色調領域まで、「薄い色」としてもつイメージは「pale」、「light」、「light grayish」の色調領域まで及ぼした。このことから、「鮮やかな色」と「薄い色」は韓国と日本という国の環境的要因と関係なく、連想される色彩領域が一致しやすい色彩語であると思われる。

次に、3集団間において、大きく異なった領域として選ばれた色彩語は、「柔らかい色」、「くすんだ色」、「濃い色」、「明るい灰みの色」、「暗い灰みの色」、「澄んだ色」であった。「柔らかい色(A型)」において、韓国群と日本在住韓国群は「pale」、「light grayish」、「soft」のイメージをもつ反面、日本群は「pale」、「light grayish」、「soft」以外にも「vivid」、「dark grayish」、「light」のイメージまで示した(図1)。「くすんだ色(A型)」においても日本群は、韓国群や日本在住韓国群と異なる結果を示した(図2)。また、日本群は各言語において、韓国群や日本在住韓国群より選択した色の頻度が高かった。その代表的なのが「濃い色」である(図3)。一方、日本在住韓国群が「くすんだ色(B型)」、「暗い灰みの色(B型)」、「濃い色(B型)」に対してもつ色彩イメージは、日本群や韓国群とは異なる色彩領域であることもわかった(図4、5、6)。また、「澄んだ色(B型)」、「明るい灰みの色(B型)」に対して連想される実際の色彩は、各群それぞれ異なる領域として選択された(図7、8)。

以上のことから3つの点が考えられる。1つ目は、色彩言語からイメージされる色域の範囲において、環境の影響を排除できないということである。2つ目は、短波長系列色(B型)より長波長系列色(A型)において、色彩語からイメージされる色域の範囲が一

致しやすいと判断された。最後に、色彩語の「明るい色」、「鮮やかな色」、「強い色」、「暗い色」からイメージされる色域は環境を超えて一致しやすいが、色彩語の「くすんだ色」、「柔らかい色」、「明るい灰みの色」、「暗い灰みの色」、「澄んだ色」からイメージされる色域は、人々それぞれ異なる可能性があると考えられる。

3.2. 色で表す日本と韓国のイメージ比較

3集団は「韓国」のイメージとして「vivid tone」を連想することが一致された(図 9)。その理由として、「情熱的」、「感情的」という指摘が多かった。また、「日本」のイメージとして「pale tone」、「light grayish tone」を連想していることが3集団において一致された(図 10)。その理由として、「落ち着いている」、「理性的」が多く出現された。

ところが、韓国群と日本群は各々、母国に対するイメージが、他の2つの集団とは異なる点に注目される。すなわち、韓国のイメージに対して韓国群は、日本群や日本在住韓国群がイメージしているより「落

ち着いた色調; grayish, dark grayish, light tone」らに対する選択率が高く、日本のイメージに対して日本群は、韓国群や日本在住韓国群がイメージしているより「鮮やかな色調; vivid, bright, light tone」らに対する選択率が高い。その色を選んだ理由からも、日本群は日本に対するイメージとして「情熱的; 韓国のイメージに多かった理由」という評価をもっているし、韓国群は韓国に対するイメージとして「落ち着いている: 日本のイメージに多かった理由」という評価ももっていた。これらのことは、日本と韓国は各分野で活発な交流を行なっているが、実際にはお互いにまだ知られていないところが多いかもしれないと解釈される。

4. 課題

本研究の結果が、韓国人と日本人の一般的な傾向として提示する点は弱い。しかし、韓国と日本を比較する研究において、日本在住韓国人の資料が比較できたことは有意義であると思慮される。日・韓交流において有用に適用されることを念頭する際、これからさらに持続的な調査が要求される。

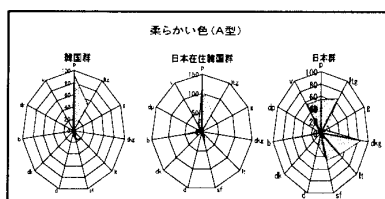


図1. 柔らかい色(A型)

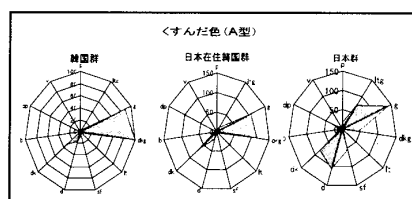


図2. くすんだ色(A型)

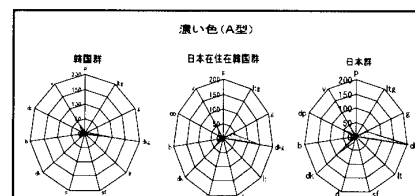


図3. 濃い色(A型)

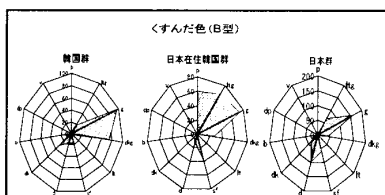


図4. くすんだ色(B型)

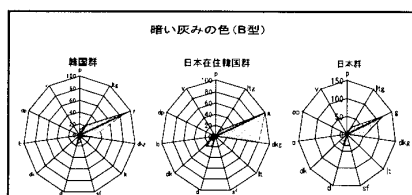


図5. 暗い灰みの色(B型)

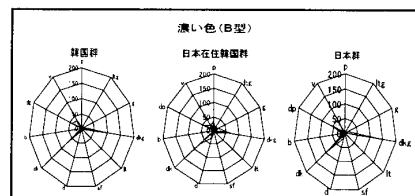


図6. 濃い色(B型)

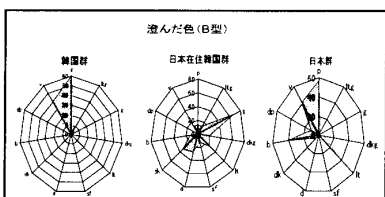


図7. 澄んだ色(B型)

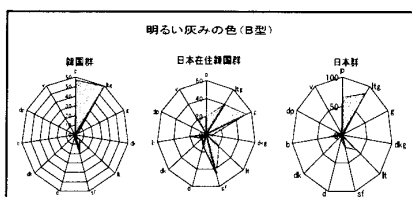


図8. 明るい灰みの色(B型)

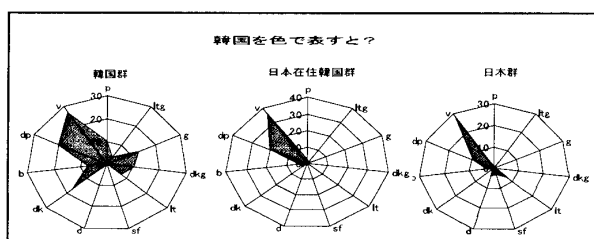


図9. 韓国を色で表すと

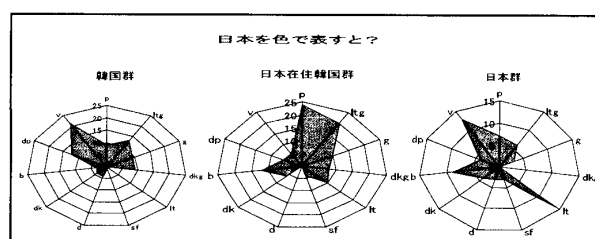


図10. 日本を色で表すと